

# まればと海縁ネットワーク論序

— 折口信夫『古代研究 民俗学篇』を題材として —

野地 恒有

\*常世浪寄する伊勢国の西宮秀紀先生に捧ぐ

(一) 正月行事は〈民俗〉ではない

本稿はまず、「民俗」に対する従来とは異なる私の解釈を述べることから始まる。民俗とは、伝承性を帯びた行為や造形物から引き出された論理・理法・法則・原理・体系などのことである、と私は考えている。つまり、民俗とは伝承の理<sup>ことば</sup>のことである。「理」と言っても、たとえば「この言い伝えは理<sup>ことば</sup>にかなっている」などといった合理的に説明できるといった意味ではまったくない。伝承性を帯びた行為などに埋め込まれた論理・理法・法則・原理・体系などのことである。民俗の研究とは、さまざまな人間活動の中から伝承性を帯びた行為や造形物（それは従来の民俗学において商標登録された対象だけを指すのではない）を取り出しそのうつりかわりを精緻に記録することを基本とするが、常にそこから論理・理法・法則・原理・体系などの

伝承のことわりを追求しなければならない。

しかし、一般的に民俗といった場合、伝承的な行為や造形物そのものを指して使われている（造形物については民具として民俗と区別するむきもあるが、本稿では含む）。「自治体史・民俗編」とか「博物館の民俗展示」などといったときには、こちらの意味で使われている。伝承のことわりを民俗と呼ぶならば、具体的に記述されただけの事例そのままは民俗ではない。そこで、従来使用されているような意味での民俗と区別するために、本稿では伝承のことわりの意味でとらえた民俗を〈民俗〉とかぎ括弧付きで表記することとする。つまり、民俗学とは〈民俗〉≡伝承のことわりを明らかにする学である、と私は考えている。他方、〈民俗〉の意味から言うと、正月、盆、何かの祭り、葬式、職人の道具類などの事例は、いかに精緻に描かれていようともそれだけでは〈民俗〉ではない。これらのような伝承的な行為や造形物の事例そのままについて本稿では民俗と

は呼ばず、「民俗的事象」と表記することとする。

これまでくり返し主張してきた私のこのような〈民俗〉のとらえ方について、故湯川洋司氏は「最近、これ〔民俗〕の一般的な理解―引用者注」とやや違って面白い発言だと思っただのは、野地恒有さんが書かれた（中略）今まで民俗といった時に、具体的な生活の事実といったところに着目してきていたけれども、野地さんは、民俗というのは伝承に基づく行為や行動から引き出された論理であると言っている。私としてはそこが非常に面白いと思う」と述べている（湯川 二〇〇九・一七〜一八）。他方、故宮本袈裟雄氏や野本寛一氏からは私の〈民俗〉のとらえ方に対して反対の意を書簡にいただいた。

こうした私の〈民俗〉のとらえ方を、折口信夫の「古代研究」を題材として述べて、さらに〈民俗〉としての海縁ネットワーク論への展開にふれたい。

(二) 折口信夫の「生活の古典」・「古代」、そして〈民俗〉  
折口信夫の『古代研究 民俗学篇』所収の「髻籠の話」をみてみよう。髻籠とは竹細工の祭具のことである。髻籠をはじめ七夕竹、精霊棚の竹、盆の切籠燈籠、十日戎の笹などの祭具に共通する祭りのしくみとして、折口は「依代」〔招き手の側から言えば「招代」〕という言葉を示した。

その中で次のように述べている。

「元來空漠散漫たる一面を有する神靈を、一所に集注せしめるのであるから、適当な招代がなくては、神々の憑り給わぬはもとよりである。この理は、極々の下座の神でも同じことで、賀茂保憲が幼児に式神が馬牛の偶像を得て依り来るを見たという話、さらに人間の精霊でも瓜・茄子の背に乗って、始めて一時の落着き場所を見出すと言うなども、同じ思想に外ならぬ。神殿の鏡や仏壇の御象、さては位牌・写真の末々に到るまで、なるほど人間の方の都合で設けた物には相違ないが、これが深い趣旨は、右の依代の思想にあるのである。」（太字は引用者による。また、引用にあたり表記を一部改めた。）（折口 一九六五・一八四）

祭具や「神殿の鏡や仏壇の御象、さては位牌・写真の末々」などに共通する「空漠散漫たる一面を有する神靈を、一所に集注せしめる」という論理が「依代の思想」である。髻籠をはじめ七夕竹、精霊棚の竹、盆の切籠燈籠、十日戎の笹などの民俗的事象から抽出される「理」、「思想」が「依代」である。ここで折口が言う「理」や「思想」がつまり〈民俗〉に相当する。言いかえれば、髻籠をはじめ七夕竹、精霊棚の竹、盆の切籠燈籠、十日戎の笹などは〈民俗〉で

はなく民俗的事象であり、依代が〈民俗〉である。

別のところでは、「神道に現れた民族論理」の中で折口は次のように述べている。

「私としては、日本民族の思考の法則が、どんな所から発し、展開し、変化して、今日に及んだかに注目して、その方向から探りを入れて見たい。(中略)

つまり日本人の民族的思考の法則がほんとうにわかっているからである。(中略)

私はこの民族論理の展開して行った跡を、仔細に辿って見て、然る後始めて、真の神道研究が行われるのであると考える。(太字は引用者による。)(折口 一九六六・一四七)

これら「日本民族の思考の法則」、「民族的思考の法則」、「民族論理」がすなわち〈民俗〉に相当する。〈民俗〉とは、さまざまな民俗的事象から抽出された折口の言う「理」、「思想」、「日本民族の思考の法則」、「民族的思考の法則」、「民族論理」のことである。

他方、民俗的事象に相当するものを、折口は「生活の古典」、「しきたり」と呼んでいる。折口が民俗学の対象を「生活の古典」と呼んだことはよく知られている。「生活の古典」と「しきたり」について、「古代生活の研究―常世

の国」の中で次のように述べている。

「古典の魅力が、私どもの思想を単純化し、よなげて清新にすると同様、私どもの生活は、功利の目的について廻らぬ、いわばむだとも思われる様式の、由来不明なる「為来り」によって、純粹にせられることが多い。(中略)

生活の古典なるしきたりが、新しい郷党生活にそぐわない場合が多い。(中略)(古代生活の研究のために)私どもはまず、古代文献から出発するであろう。そうしたその注釈としては、なるべく後代までながらえていた、あるいは今もわずかに遺っている「生活の古典」を利用してゆきたい。(中略)

三月の雛祭り・端午の節供・七夕・盂蘭盆・八朔・・・などを中心に、私どものやすらいを感じるしきたりが毎年くり返される。(中略)私は、今門松のことを多く言うた縁から、元旦大晦日にわたるしきたりの最初の俵を考えて、古代研究の発源地をつくる。(傍点は原文のまま。太字は引用者による。)(折口 一九六五・一六〇一七)

「生活の古典」とは〈民俗〉のことではない。「生活の古典」とは「三月の雛祭り・端午の節供・七夕・盂蘭盆・八朔」などの「しきたり」のことであり、すなわち民俗的

事象のことである。「生活の古典」＝「しきたり」から明らかにされた論理・理法・法則・原理・体系などが〈民俗〉なのである。

そして、折口は「生活の古典」＝「しきたり」を対象とすることを「古代研究の発源地」とする。ここにおいて折口の言うこの「古代研究」の意味するところが問題となる。折口の「古代研究」について、池田弥三郎はその「古代」とは「クロノロジカルな『古代』」や「歴史における時代区分の一つである『古代』」ではないと述べている。その点私も同様に、折口の「古代」は「歴史における時代区分の一つである『古代』」ではないととらえる（池田 一九七四・二七六）。

それでは折口の「古代」とは何か。池田は「実感によって認知し把握した古代的要素」と述べているが（池田 一九七四・二七六～二七七）、しかし、私はそうとは考えない。折口の〈古代〉とは、「古代文獻」（この場合はクロノロジカルな意味での古代）や「生活の古典なるしきたり」（＝民俗的事象）から抽出された論理・理法・法則・原理・体系などのことである、と私はとらえる（以下、その意味で用いる古代をかき括弧付きとする）。論理・理法・法則・原理・体系という形で普遍化させることによって、折口の中で〈古代〉と〈民俗〉はつながっているのである。そし

て、その論理・理法・法則・原理・体系などが見出されることを折口は「発生」と呼んだのであった。それゆえ折口の言う「発生」とはクロノロジカルに遡る「起源」の意味ではない。

（三）「まれば」とから〈民俗〉としての海縁ネットワーク論へ

禊ぎという神事の前に海や川の水で穢れをすすぎ清める民俗的事象がある。また、元旦の朝に水を汲んで飲むという若水儀礼という民俗的事象がある。折口は禊ぎや若水儀礼に共通する論理として「変若」という考えを、「貴種誕生と産湯の信仰と」の中で次のように提起した。

「禊ぎの水は―引用者注）ある期間を限り、ある土地から、この土地により来るものとみなされていた。すなわち、その水の来る本の国は、常世国であり、時は初春、および臨時の慶事の直前であった。海岸・川・井、しかも特定された井に湧くのである。その水を用いて沐浴すると、人はすべて始めに戻るものである。これを古語で変若と言ふ。その水をまた変若水と称する。（中略）すなわち、常世の変若水であったのだ。」（折口 一九六五・一四三）

「変若」とは若返るとかよみがえるの意味である。つまり、禊ぎや若水儀礼は変若の儀礼である。海のかなたの常世から時を限って寄せて来る変若水によって、生命力が更新されるのである。「おつ」と同義の「すでる」という古語を折口はあげて、「若水の話」の中では次のように述べている。

「すでることのできない人間がこれ〔若水―引用者注〕によつてすでる力を享けようとするのである。(中略)

なぜ、すでることを願うたか。どうしてまた、これから言うように、すでる能力のある人間が間間あって、それが人間中の君主・英傑に限ってあることなのか。この説明は若水の解釈のみか、日・琉古代靈魂崇拜の解説にもなり、その上、曆法の問題・祝詞の根本精神・日本思想の成立の根底に積った統一原理の発生にもなるのである。(傍線は原文のまま。太字は引用者による。)(折口 一九六五・一二〇―一二一)

禊ぎや若水儀礼という民俗的事象から抽出された「統一原理」(民俗)が変若・すでる力ということになる。この変若・すでる力をもたらす水とは常世から時を定めて寄せて来る「常世浪」のことである。「常世浪」の変若・す

でる力の背景には、折口の根本的な統一原理ともいうべき、常世論「まれびと」論がある。「まれびと」とは、時を定めて海のかなたの常世の国からやって来て人々に「富と齡とその他若干の幸福」をもたらして帰る神のことである(折口 一九六五・三三二―三三四)。

私は、この「まれびと」を海縁ネットワーク論としてとらえなおしたいと考えている。海縁ネットワークとは海のえにしによつて作り出されるネットワークのことであり、私の造語である。ネットワークに「海縁」を冠するのは、土地に基づく関係の地縁や血筋に基づく関係の血縁に對立する言葉として明示させたいからである。血縁や地縁とは異なる、海を媒介とした人やモノによつて作り出される関係である。また、この関係は沿岸部だけのことではなく、内陸部との関係も含まれるので、海縁の意味するところは沿岸や海域とも異なる。

海縁ネットワークから言えば、まれびと論とは海を媒介とした外部(他界)との関係であり、他界観における海縁ネットワーク論とすることができ。なぜわざわざ海縁ネットワークを持ち出すかという点、それは、まれびとを時間と空間を限定してとらえなおしたいからである。

折口は「古代日本人の信仰生活には、時間空間を超越する原理が備わっていた」(水の女)、折口 一九六五・一

○五)と云う。先に折口の〈古代〉と〈民俗〉はつながっている指摘したように、折口の〈古代〉は原理は時間と空間を超越する。それが折口の発想の源であり大きな魅力であるとともに、同時に大きな障壁である。そこで私は、時間を現在に至る五〇年から一〇〇年間の同時代に、空間を外来者(移住者)の定住生活(移住開拓島)に限定して、まれびとを海縁ネットワーク論として展開させたい。同時代史は過去の蓄積した現在の移り変わりを対象とする。移住者によって形成される定住生活は外部との関係性の構築によって成立するという観点から、同時代における移住生活の発生について、まれびとと海縁ネットワーク論を組み立ててみたいと考えている。そして、まれびとと海縁ネットワーク論によってとらえられた社会や文化の特徴が「海洋性」なのである。

【引用文献】

- 池田弥三郎 一九七四 「解説・折口信夫研究」折口信夫『古代研究Ⅰ 民俗学篇Ⅰ』角川書店
- 折口信夫 一九六五(新訂)『折口信夫全集 第二卷 古代研究(民俗学篇Ⅰ)』中央公論社
- 折口信夫 一九六六(新訂)『折口信夫全集 第三卷 古

代研究(民俗学篇Ⅱ)』中央公論社

湯川洋司(他)二〇〇九「討論『日本の民俗』(1今、新たに民俗学を起こすとしたら)」湯川洋司(他編)『日本の民俗一三 民俗と民俗学』吉川弘文館